

総称の le N をめぐる一論争について

古川, 直世
筑波大学文芸言語学系教授

<https://doi.org/10.15017/9924>

出版情報 : Stella. 9, pp.71-78, 1991-03-15. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



総称の le N をめぐる一論争について

古 川 直 世

§ 0. はじめに

『恐怖に襲われた街』(原題 *Peur sur la ville*) という映画のなかで, ジャン＝ポール・ベルモンド扮する刑事が, アパルトマンの前で, 一匹の猫を相手に語りかける場面がある。

- (1) Comment tu t'appelles, toi? Hein? Je sais. *Le chat de gouttière*. Pas très beau, tu sais. Pas beau, mais t'es gentil. Oh! tu ronronnes! Ah, oui, t'es content, hein?

イタリック体で示した名詞句 *le chat de gouttière* は何を指示しているのだろうか。この名詞句は, 総称的用法か否か, といった外延 (extension) 的な分析では説明がつかない。*le chat de gouttière* は, ドラ猫一般でもなければ, 前文脈で既に知られたドラ猫でもないからである。それでは, 何を指しているのか。*chat de gouttière* という意味, 内包 (intension) を指示しているのである。一匹のドラ猫を指す *un chat de gouttière* という外延の世界でとらえられた不定名詞句では, 名前の用をなしえないのである。

このような le N の用法は, MARTIN (1986) が LE intensionnel (内包的用法の LE) と呼び, 我々が FURUKAWA (1986) において, pré-extensité の le N と呼んだものである。両者の意図するところは基本的に同じであるので, 以下, MARTIN に倣って, 内包的用法と呼ぶことにする。

さて, ここで次のようないわゆる総称文を見よう。

- (2) *Le castor construit des barrages.*

主語名詞句 *le castor* の用法は, 一般に総称的用法と呼ばれる用法である。本稿の目的は, (2) におけるような le N の総称的用法が, 上に見た le N の内包的用法と基本的に同じである, ということ再主張することにある。このような再主張を行う背景には, MARTIN (1986), FURUKAWA (1986) らの言わば LE générique 内包指示説が, KLEIBER (1990) において批判の対象

となっている、という背景がある。本稿では、まず、§ 1で KLEIBER 説を紹介し、次に § 2において我々の LE générique 内包指示説を述べる。さらに、§ 3で KLEIBERによる LE générique内包指示説批判の論拠をみる。§ 4において KLEIBER説が妥当な説明原理ではないことを論証し、我々の LE générique内包指示説を再確認する。最後に、定冠詞の機能に対する統一的な説明を提示し、LE générique内包指示説が統一的な枠組みのなかで正当化されうることを示す。

§ 1. KLEIBER (1990) の LE générique 等質化・物質名詞化説

KLEIBER の主張は、一言でいえば、総称的用法の単数定冠詞 *le* が、それが指すクラスの構成メンバーを等質化 (homogénéiser) し、*le* N 全体を物質名詞化 (massifier) する働きをする、ということである。以下、KLEIBER (1990) の一節を引用しよう。

La différence entre *Les* et *Le* générique se laisse donc exprimer en termes de massif et comptable. *Les* + *N* générique est un SN comptable: il renvoie à la classe ouverte des *N*, c'est-à-dire à un référent conçu comme constitué d'occurrences distinguables. *Le* + *N* générique forme un SN massif: il renvoie à l'individu générique *N*, c'est-à-dire à un référent conçu comme homogène, non constitué d'occurrences discernables. [...] Avec *les castors* générique, le renvoi se fait à une classe d'individus distincts, qui sont différenciables. *Le castor* générique a pour effet de neutraliser la discernabilité inhérente à cette classe pour présenter le tout sous un aspect homogène, où la différence entre les occurrences individuelles se trouve neutralisée. (p. 85)

以上の KLEIBER 説を筆者流に図式化すれば、次のようになる。

(3) a. *Le castor* générique = (a, a, a, a, a, ...)

b. *Les castors* générique = (a, b, c, d, e, ...)

この図式において丸括弧は、ビーバーという種そのものを表す。(3) a における丸括弧の中身の a, a, a, ... は、等質的な、相互に区別されない、種の構成メンバーとしての個々のビーバーを表し、(3) b における中身の a, b, c, ... は、相互に異質的な、区別された、種の構成メンバーとしての個々のビーバーを表している。

§ 2. LE générique 内包指示説

次に, MARTIN (1986) の一節の引用によって, LE générique 内包指示説を明らかにしよう。

L'hypothèse sera que *le* est «intensionnel», c'est-à-dire que, dans *le chat*, il renvoie à l'intension de *chat*, c'est-à-dire à l'ensemble des propriétés qui font qu'un chat est un chat. [...] *Le chat* réfère génériquement à la «chatitude», à ce que le locuteur considère comme caractéristique du chat. Par opposition, *les chats* sera extensionnel: dans la lecture générique, *les chats* renvoie à l'ensemble des chats, ... (p. 190)

MARTIN が挙げている, LE générique 内包指示説にとって論拠となるデータをいくつか見よう。まず, 固有名詞は, 内包的用法の *le* は受け入れにくい, という事実がある。

(4) a. Les Jeanne sont des êtres doux. (p. 191)

b. ?La Jeanne est un être doux. (ibid.)

(4) b がおかしいのは, 固有名詞 *Jeanne* がまさに内包をもたないからである。第二に, 述語に固有名詞をふくむ文,

(5) a. Les enfants aiment beaucoup les tableaux de Marie.

(p. 193)

b. ?L'enfant aime beaucoup les tableaux de Marie. (ibid.)

において, (5) b の *l'enfant* がおかしいのは, 「マリーの絵が好きである」ということが, 子供を子供たらしめる基本的特性とは考えにくいからである。第三に, 二つのクラスの特性, いいかえれば, 二つの内包を比較する場合, より自然であるのは, *les* よりも *le* である, という事実がある。

(6) a. L'avion est plus rapide que le train. (p. 192)

b. La maison a des servitudes que n'a pas l'appartement.

(ibid.)

MARTIN はこの外にもいくつかの論拠を挙げているが, LE générique 内包指示説を理解するにはこれで十分であろう。

§ 3. KLEIBER (1990) による LE générique 内包指示説批判

KLEIBER による批判は, 単純かつ巧みである。次の文を見よう。

(7) a. L'homme a mis le pied sur la lune en 1969. (p. 47)

- b. Le castor a été introduit en Alsace par les autonomistes en 1936. (ibid.)
- c. Le lynx est en voie de disparition. (ibid.)
- d. Le chat est un animal intelligent. (ibid.)

KLEIBERによれば、(7) aが意味するのは、人間という「内包, 概念」が1969年に月に足をふみだした、ということではない。(7) bにおいて、アルザスの自然に放たれたのがビーバーという「内包, 概念」である、と考えるのは馬鹿げている。(7) cにおいては、大山猫という「内包, 概念」は、大山猫とともに絶滅するわけではない。(7) dについては、利口な動物であるのは、MARTINがいう chatitude とか、猫という概念ではない、という。

もう一つ KLEIBER による批判点を挙げよう。KLEIBER は、冠詞 *le* をもつ総称名詞句が指示対象として「意味」をもつとするなら、N + Modificateur の場合、まさにその意味、内包を指示するために、冠詞 *le* が用いられるはずであるが、事実はそうではない、という。その例として、彼は次の例を挙げている。

- (8) a. Les chats de notre rue sont plus gros que les chats de votre rue. (p. 119)
- b. ?Le chat de notre rue est plus gros que le chat de votre rue. (p. 118)

人間という「内包, 概念」が1969年に月に足をふみだした、と考えるのは馬鹿げているという KLEIBER の一番目の批判は、言語表現のレベルと解釈のレベルの混合に基づくものである。例文 (7) a において、現実には月に足をふみだしたのはアームストロングという一人の宇宙飛行士であるとしても、人類としてその行為を行ったのである。l'homme は、言語表現のレベルでは、あくまでも、人間という「内包, 概念」を指示し、解釈のレベルにおいて人類という種を表すとして解釈されると考えれば、矛盾はない。このことは、次のように図式化されよう。

- (9) l'intension "homme" + x = l'espèce "homme"

x は、l'homme が置かれるコンテキストである。l'intension "homme" は言語表現のレベルに属し、l'espèce "homme" は解釈のレベルに属する。KLEIBER の論法で行けば、人類という抽象概念には足がないなどと主張することになるが、このような主張は詭弁であろう。

二番目の批判に対しては、次のように答えることができる。定名詞句 *le*

chat de notre rue が chat de notre rue の内包を指しえないのは、chat de notre rue が単一の名詞 chat とは異なり、ラングに登録された名詞ではない、という単純な理由による。chat de notre rue は、その内包の存在が話し手と聞き手の間で前もって了解されているものではないため、指示対象にはなりえないのである。le chat の場合は、chat という名詞の内包の存在が既に確立しているからこそ、内包を指示対象とする読みが可能になるのである。要するに、総称的用法の le は、ラングに登録された単一の名詞が表す内包しか指しえないのである。以上のことから、KLEIBER の批判は、的はずれの批判である。序ながら、KLEIBER が総称名詞句であるとする (8) a の les chats de notre rue は、FURUKAWA (1990) で主張するように、いわば即席の総称名詞句 (SN générique discursif) である。

§ 4. LE générique 等質化・物質名詞化説批判

§ 4. 1. まず第一に、KLEIBER の主張の矛盾点を指摘しよう。次の例文をみよう。

- (10) a. Le pantalon est pratique. (p. 143)
 b. L'avion est rapide. (ibid.)
 c. La cravate est obligatoire. (ibid.)
 d. Le bouquet fait toujours plaisir. (ibid.)

これらの例文における単数定冠詞 le について、KLEIBER は次のように説明している。

La présence de *Le* a pour origine l'homogénéisation qui découle de l'appréhension du référent à l'intérieur d'un processus dans lequel il apparaît comme unique: stéréotypiquement, on ne porte qu'un pantalon, on ne prend qu'un avion, on n'arbore qu'une cravate et on n'offre qu'un bouquet. (p. 143)

KLEIBER が書いているように、les pantalons ではなく le pantalon となるのは、通常、人は一本のズボンしか穿かないからであろうが、この説明からは LE générique 等質化説は出てこないはずである。単数形で le pantalon となるのは、まさしく、人がズボンを穿くという一つの個別的な具体的状況を考えるからであろうが、そうであるならば、個々の複数の具体的状況における pantalons を等質化するという説とは矛盾するのである。

§ 4. 2. 第二に、LE générique 等質化説は、等質化されるものの存在、すなわち相互に異質な「複数」の構成メンバーをもつクラスの前存在を前提としている。総称の *le castor* は、*les castors* と同じく、「複数」の構成メンバーをもつクラスを指すと考えているのである。この前提には、合理的な根拠はない。次のデータが示すとおり、総称の *le castor* は、数の概念とは無縁なのである。

- (11) a. *Les castors, ça construit des barrages.*
 b. *Un castor, ça construit des barrages.*
 c. *?Le castor, ça construit des barrages.*

ça は、*les castors*, *un castor* のように、Discontinu の世界、いいかえれば数の世界でとらえられた指示対象をもつ名詞句とは共起するが、*le castor* のように数に無縁の Continu の世界でとらえられたものとは共起しにくい。結局、*le N générique* と *les N générique* の相違は、KLEIBER の主張するように、構成メンバーの等質化と異質性の対立によって特徴づけられるのではなく、Continu と Discontinu の対立によって特徴づけられるのである。図式化すれば、次のようになる。

- (12) a. *le N générique* = ()
 b. *les N générique* = (a, a, a, a, a, ...) ou (a, b, c, d, e, ...)

筆者の考えでは、*le N générique* の丸括弧の中身は、continu であるか、空である。一方、*les N générique* の丸括弧の中身は、a, a, a であってもよいし、a, b, c であってもよい。要するに、*les N générique* の丸括弧の中身は、構成メンバーが等質であるか、異質であるかは問題ではなく、構成メンバーが「複数」個存在すればよいのである。

§ 4. 3. 第三に、LE générique 物質名詞化説が妥当でないことを明らかにしよう。LE générique が *le N* 全体を物質名詞化するのであれば、統辞的ふるまいが本来の物質名詞と同じになるはずである。ところが、*ça* との共起の可、不可が示すように、事実はそうではない。

- (13) *?Le castor, ça construit des barrages.*
 (14) a. *Le sucre, ça peut nuire à la santé.*
 b. *Les castors, ça construit des barrages.*

一見逆説的なことながら、総称の物質名詞 *le sucre* は、総称の単数可算名詞 *le castor* とは異なり、数の世界でとらえられているのである。数の世界でと

らえられている点では、(14) a, b が示すように、le sucre は、総称の複数可算名詞 les castors と同じなのである。総称の le sucre は、図式的に言えば、中身が continu か空である丸括弧ではなく、les castors と同じく、中身として複数の構成メンバーをもつ丸括弧なのである。

§ 4. 4. 最後に、LE générique 等質化・物質名詞化説の根本的弱点として、ゼロ記号に等質化・物質名詞化という積極的な機能を認めている、という点を挙げるができる。複数定冠詞 les と単数定冠詞 le は、それぞれ次のように分析されうるからである。

- (15) a. les = LE + S
b. le = LE + O

ゼロ記号に積極的な機能を認めることは、FURUKAWA (1986) においてゼロ冠詞説について指摘したように、好ましい解決法ではない。

§ 5. 定冠詞の機能に対する統一的な説明

単数定冠詞 le の総称的用法のみに一つの特別な機能を認める KLEIBER 説は、ad hoc な説明法である。筆者の考えでは、単数定冠詞 le の機能は、「総称であれ非総称であれ、あいまいでない形で、あるいは、話し手があいまいでないとみなす形で、一つの事物を指示する」ことである。次の例をみよう。

- (16) Regardez *le bout d'un crayon*, ne distinguez-vous pas les deux parties de la gaine séparée par le milieu ?

鉛筆の端は二つあるから、どちらの端なのか論理的にはあいまいであるが、語用論的にはあいまいであるとはみなされない。どちらでもよいからである。この種の論理的あいまいさは、あいまいであるとはみなされず、単数定冠詞の使用が許容されるのである。

本稿の冒頭に挙げた例文に戻ろう。既に示唆したように、le chat de gouttière は、ドラ猫という意味そのもの、いいかえれば chat de gouttière の内包そのものを指示している。指示対象が chat de gouttière の内包そのものであるから、一つしか存在しない一種の固有名詞であり、指示上のあいまいさなく、指示されうるのである。

本稿のテーマである総称の le castor の場合も事情が同じである、ということは既に明らかであろう。le castor は、castor の内包というラングに登録された一定のものを、指示上のあいまいさなく、指示しているのである。あるい

は、通常の言葉でいえば、le castor は、castor という種を、種の中身については何ら言及することなく指示しているのである。

§ 6. おわりに

本稿では、KLEIBER による LE générique 等質化・物質名詞化説を批判し、総称の le N は、N の内包を指示するという主張を行った。このような主張は、「単数定冠詞の機能は、総称であれ非総称であれ、あいまいでない形で、あるいは、話し手があいまいでないとみなす形で、一つの事物を指示することである」とする統一的説明に合致するものである。

参考文献

- N. FURUKAWA (1986): *L'article et le problème de la référence en français*, France-Tosho, Tokyo.
- N. FURUKAWA (1989): «Le SN générique et les pronoms ça / il (s). Sur le statut référentiel des SN génériques», *Modèles linguistiques*, XI, 2, pp. 37–57.
- N. FURUKAWA (1990): «Cet animal construit des barrages: Le SN générique et ses modes de référence», *L'Information grammaticale*, n° 47, pp. 3–10.
- G. KLEIBER (1990): *L'article LE générique: la généricité sur le mode massif*, Droz, Genève-Paris.
- R. MARTIN (1986): «Les usages génériques de l'article et la pluralité», in *Déterminants: syntaxe et sémantique*, J. David et G. Kleiber (éds.), Klincksieck, Paris, pp. 187–202.